

江戸時代の海外貿易は、初期の相対貿易、寛永八年（一六三一）からの糸割符制、明暦元年（一六五五）から相対貿易、寛文十三（一七三三）から市法貨物商法、貞享三年（一七八六）春から夏にかけて糸割符復活、同年秋より定高制へと移行してゆく。

糸割符制は

糸割符仲間の生糸独占による価格高騰、糸割符仲間の資力では購入出来ぬ程の国内の生糸需要増大

二糸割符商人が幕府の都市政策上存在理由がうすくなったこと等の理由により廃止され、相対貿易となつた。これは一定量の品物を日本役人立合のもとにせり、最高値のものが落札するのである。

日本側の需要が激しかったため、前にもまして価格は高くなり、貿易の主導権は外国側に移り、おびただしい金銀が海外へ流出し、高価格のせり故品物入手出来ずに破産するものもあらわれた。

これに対処するため幕府（長崎奉行）は五ヶ所より有力商人十人をえらんで札宿老とした。彼等は輸入価格を一方的に比較的安く決定し、長崎奉行の許可を得た上で外国側に通告、従がわしめた。

これは主導権獲得、金銀流出防止に効あつた。外国人側には大打撃だつた。一方、国内商人は五ヶ所に区別けされ、一ヶ所あたりの貨物量が割当てられ、五ヶ所ごとに、資本に應じて一定額まで入札により購入出来た。その利益金は市法増額といわれ、資本額に應じて配分された。これが市法貨物商法である。これは貿易額に制限ないのが欠陥であり、次の定高制へうつる。

筑波山事件の研究

—文久・元治期の尊攘運動の

一考察—

橋崎伸一

まえがき

第一章、筑波山拳兵の時代的背景

第一節、水戸藩の動向

二々、中央政局の動向

三々、天狗党の筑波山拳兵

第二章、事件の進展

第一節、天狗党内部の思想的対立

二々、武田伊賀の参加と内記の拡大

三々、武田正生の西上と長州藩の東上

第三章、筑波山事件の歴史的 성격

第一節、天狗党の思想的性格

二々、天狗党の社会的基盤

三々、事件の歴史的意義

清朝中期における

辺境異民族政策について

松本竜雄

現在中国において少数民族と云われる人々ほどのくらの数であろうか。野原四郎氏によれば、

回族、二五五万人、ウイグル族、三六四万人、チベット、二七七万人、族、三二五万人、苗族、二五一万人、布依族、一二四万人、僳族、六六一万人

これらの諸民族は、いずれも新疆、甘肅、チベット、雲南、貴州といった中国の辺境地帯に居住している。しかも、これらの少数民族も漢民族と同様、現代中国建設のため力を尽しているのである。しかしながら、これら少数民族に対しての歴史的評価は未だ十分になされていない状態である。わずかに回民族